2017年　NCK(日本カテキスタ会)主催：長崎教区信仰養成部共催・公開講座

『第二バチカン公会議公文書』をシリーズで学 No.4

信徒使徒職と宣教活動

刈り入れは多いが、働く人は少ない（マタイ9・37）

【第三講話】「信徒による福音宣教の実践とは」

11月26日（日）9:30~12:30

佐々木 博 神父（仙台教区）

I　信徒こそ福音宣教の主力である

1. 初代教会におけるケーススタディ：『初代キリスト教徒の日常生活』109~144頁参照）

十二使徒たちがこの世を去ってから、教会を受け継いだ次世代に、宣教活動の主力になったのは、無名の大勢の信徒の宣教者だった。

特に、西暦95年から197年、つまり一世紀の終わりから二世紀の終わりまでの時代の信徒による福音宣教の実践によってキリスト教は、あたかも「伝染」のように広められて行った。しかも、その原動力は、キリスト者一人ひとりが抱いていた信仰の喜びにあり、その恵みを一人でも多くの人と分かち合わないではいられないという情熱にほかならない。つまり、福音宣教がまさに信仰の喜びのあふれだったと言えよう。

それは、そもそも、キリスト者になること自体が、必然的に宣教者になるという体験だったのでなかろうか。その体験は、使徒パウロは、次のように喝破している。

「もっとも、わたしが**福音を告げ知**らせても、それはわたしの**誇り**にはなりません。そうせずにはいられないことだからです。**福音を告げ知**らせないなら、わたしは**不幸**なのです。」（一コリント9・16）

つまり、洗礼を受けてキリスト者になること自体が、信仰の喜びと恵を分かち合う、すなわち、キリストを伝える使命に与るという自覚があったと言えよう。

それは、まず、家庭から福音が伝えられて行ったということから知ることができる。つまり、家族の中で信仰が一人ひとりに伝えられたという体験にほかならない。

例えば、最初に信者になった妻からその夫へ、あるいは、信者の夫から妻へ、また信者になった主人から、奴隷へ、あるいは信者である奴隷から主人へ、まさに、「伝染」

のように広がって行ったと言えよう。

また、さらに、そのような信徒の中には、自分の職業を投げ打って、まさに福音宣教のために自分を教会にささげた人たちも出てきたのである。けれども、殆どの信者たちは、自分の生活に留まり、むしろ仕事場でキリストを伝えたいという情熱につき動かされてキリストを伝えたのではなかろうか。

ちなみに、教会の歴史の初めから、女性が福音宣教のための掛け替えのない役割を担っていたことも確認できる。だから、パウロの手紙の最後の挨拶で、女性の協力者たちに言及している。「ケンクレアイの**教会**の**奉仕者**、わたしの**姉妹**フェベのことをよろしくお**願**いします。あなた**方**は**聖**なる**人々**にふさわしく、また、**主**に**結**ばれている**者**らしく**彼女**を**迎**え**入**れ、あなた**方**の**助**けを**必要**とするなら、どんなことでもして**助**けてあげてください。・・・

わたしと**共**にキリスト・イエスに**仕**えている**強力者**プリスカとアキラによろしく。この**人**たちは**命懸**けで、わたしの**命**を**守**ってくれました。わたしだけでなく、**異邦人**のすべての**教会**も、**彼女**らに**感謝**しています。」(ローマ 16.1-5a)

2. キリシタン時代の信徒の活躍

迫害が始まったキリシタン時代、数少ない外国宣教者、特にパードレ（神父）たちを支え、教会を力強く守りぬいたのは、信徒たちであった。

そこで、信徒の使徒的活動の共同体が、重要な役割を担っていたと言えよう。このような使徒的共同体は、「こんふらりや」とか、「ミゼリコルヂア（慈悲の組)」と呼ばれ信心業や愛の実践に勢力的に取り組んでいた。(川村信三著『キリシタン信徒組織の誕生と変容』を参照)

ちなみに、キリシタン研究者の海老沢有道氏は、この信徒の共同体を次のように総括している。

「**信心の組講**—封建権力側において思想的武装が進む中で、キリシタン側でも殉教覚悟の準備教育が進められていた・・・その準備教育が信者末端にまで行届くことに寄与した信徒の組織化、ひいては迫害下にあって忍耐不抜(ふばつ)、殉教精神をかえって強化し、抵抗の共同体となったコンフラリヤ Confraria と称される信心の組講組織について・・・

慈悲の所作十四カ条

コンフラリヤはそのポルトガル呼称の示すように兄弟的親しい交わり Confraternar の同志的結社である。その起源は遠く初代教会に遡ることができるが、事実、その理念はキリストの教説に直接的に基礎を置くものである。・・・

慈悲の所作は十四有。初めの七つは色身(しきしん)にあたり、後の七つはスピリツ［霊］のあたる也。

・・・

そしてパァテル・ナウステル Pater Noster（主禱文）やケレド Credo（使徒信経）などの主要なオラショ（祈祷）や「十のマダメントス」（十戒）などとともに、すべてのキリシタンはそれを暗誦していたのである。その十戒はキリストによって、

万事にこたえてデウスを御大切に思ひ奉ることと、わが身を思ふごとく、ポロシモ（隣人）を大切に思ふ事。

と、「御一体のデウス」への信仰と忠誠、そして兄弟愛の実践として要約されている。

・・・

1559(永録二)年以来、各地の教会に付設された初等学校では、覚え易いように、毎日これらを歌唱し、解説が加えられていたのであり、かの苛烈(かれつ)な迫害を通して潜伏した「かくれ」キリシタンたちはもちろん、今なお教会に復帰しない「はなれ」たちも、それらをオラッショと称してとなえ続けていることは、それらが重要な教えとして守られ、伝承されたことを語るとともに、いかに要理教育が徹底的に行われていたかを示すものでもある。

コンフラリヤの類型

したがって、戦国乱裡に喘ぐ当時の社会にあって、キリシタンたちは教会を中心に、諸種の「慈悲の所作」を行ったのであるが、当然なことながら、より効果的に実践するために、次第にそれらの組織化が試みられる。コンフラリヤはこうして信心業とともに、まず慈悲の所作の実践を目的とした「ミゼリコルヂヤの組」Confraria de Misericordia として形成される。その医療・救らい・救貧・孤児寡婦の保護等々の活動が、戦国大名領形成期、封建的圧力の下に苦しむ人々に、物心両面にわたり、いかに大きな慰めと救いをもたらしたかは計り知れないものがある。キリシタン布教の発展も、この活動に負うことが少なくなかったことはいうまでもない。

しかし、1587(天正十五)年の、かの秀吉の伴天連追放令以後の迫害期に入ると、慈善事業的形態の維持は、財政上からだけでなく、彼らコンフラデス Confrades またはイルマンス Irmaos（組員ら）みずからの信仰と生命の危機が迫るにつれて、漸次(ぜんじ)変質して来る。勿論、彼らは、生命をも賭して迫害下にも慈善の所作を続けたのであるが、それが信仰のための牢者・配流者・殉教者家族の救済など、共済的色彩を強めてくるのも当然である。

それと共に、ますますヒイデス（信仰）を錬磨し、殉教とも辞さぬホルタレサ（堅忍

不抜）の精神を涵養（かんよう）する必要が生じて来る。そこに自己の聖化と使徒的活動とを目的とし、殉教にも備える信心会として、共同体として、弾圧下における地下教会組織として、全キリシタンを組織化するコンフラリヤが形成される。

もともと教会は建物ではない。本質的にキリストを頭首とする共同体であり、ミサによる通功によって血肉的にも一体化された信者の集団をいうのである。そこにキリシタンの団結力の強さがある。

しかし、パァドレの数も少なく、しかも迫害下にあっては潜伏活動しか出来ず、各地の教会に常駐できない当時にあって、平信徒による使徒的活動による組織が、信者団の信仰の堅持のために、迫害下の布教のために、そして地下教会の形成と維持とのために、絶対に必要なものとなって来る。」（海老沢有道著『キリシタンの段圧と抵抗』122,124~125頁）

II　信徒とはだれか

1.　聖書における信徒像

新約において「聖徒」とは、全キリスト者を指し、特定の人物は該当しない。例えば、パウロは、その手紙の冒頭で、次のようにキリスト者を説明している。

「この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。 - 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ」（ローマ1・6-7）。従って、教会全体を構成しているのはキリスト者と言えよう。

ちなみに、旧約においては、イスラエルは神に選ばれ、ただ神にのみ属し、神との特別な関係にあるため、聖なる者と呼ばれた。（申命記7・6-8参照）

例えば、コリント教会の信者のキリスト者としての召命についてパウロは、次のように総括する。

「兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思いおこしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は、地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです」（一コリント1・26-29）。

2.　尊い殉教者たちの命をかけた信仰のあかし

- 信徒使徒職の鏡 ： 『ペトロ岐部と 187 殉教者-いのちをかけて愛を証ししたキリシタンたち』67-92 頁参照。
- 母親の復活信仰のあかし ： 『恵みの風に帆をはって-ペトロ岐部と 187 殉教者物語』70-71 頁参照。

3． 第二バチカン公会議の教会論において

公会議前までは、信徒は「平信徒」とも呼ばれ、ピラミット型の教会像では、底辺に位置づけられていた。

ところが、ようやく、公会議での議論の末、次のような定義に至った。

（1） 信徒とは：「洗礼によってキリストのからだに合体され、神の民に組み込まれ、自分たちのあり方に従って、キリストの祭司職、預言職、王職に参与する者となり、教会と世界の中で、自分たちの分に応じて、キリストを信じる民全体の使命を果たすキリスト信者のことである。」（教会憲章 31 項）

（2）信徒の特質とは：「信徒の固有の特質は、世俗に深くかかわっているということである。・・・信徒に固有の召命は、現世的なことがらに従事し、それらを神に従って秩序づけながら神の国を探し求めることである。信徒は世俗の中に生きている。すなわち、世の個々のそしてあらゆる務めに携わり、家庭と社会の通常の生活条件の中で生活するのであって、彼らの生活はいわばそれらによって織りなされている。彼らはそこに神から招かれているのである。それは、自分自身の務めを果たしながら、福音の精神に導かれて、世の聖化のために、あたかもパン種のように内部から働きかけるためである。（31 項）

（3）信徒の尊厳とは：「キリストにおいて新たに生まれことから来る各成員の品位は共通であり、神の子としての恵みも共通、完徳への召命も共通であって、救いは一つ、希望は一つ、愛は分割されることはない。・・・キリストのからだの建設に関する、すべての信者に共通の尊厳と働きについては、真実に平等である。」（32 項）

（4）信徒の使徒職とは：「信徒はだれであれ、生きた成員として、教会の発展とその絶えざる聖化のために、創造主の恩恵とあがない主の恵みによって受けた自分のすべての力を用いて、寄与するように招かれている。

信徒の使徒職は、教会の救いの使命そのものへの参与であり、すべての人は洗礼と堅信を通して主ご自身からこの使徒職に任命される。・・・信徒は、とくに、自分たち

によらなければ教会が地の塩となりえない場所と環境において、教会を存在させ活動的なものとするよう招かれている。(33 項)

（5）信徒の共通祭司職とは：「信徒は、キリストに奉献され、聖霊のよって塗油されたものとして、霊の果実が自分の中につねにより豊かに実るようにするという感嘆すべき召命を受け、資質をあたえられている。実際、彼らのすべての活動、祈り、使徒的取り組み、結婚および家庭生活、日々の労働、心身の休養が霊において行われ、また生活のわずらわしさを根気よく耐え忍ぶならば、これらすべてはイエス・キリストを通して神に喜ばれる霊的いけにえとなり（一ペトロ 2・5 参照)、感謝の祭儀において主のからだの奉献に合わせて、いとも敬虔に、父にささげられる。このように信徒もまた、どこにおいても聖なる行いをもって神に礼拝をささげる者として、世そのものを神に奉献するのである。」(34 項)

（6）信徒の預言職とは：「生活のあかしとことばの力をもって、父の国を告げ知らせた偉大な預言者キリストは、栄光を完全に表す時が来るまで、自分の名と権能によって教える聖職位階だけでなく、また信徒を通して、自分の預言職を果たす。・・・この福音化、すなわち生活のあかしとことばとによるキリストの告知は、それが世の普通の生活の中で行われるということから、ある独特の性格と特別な効力をもつ。

この任務において、あの特別な秘跡によって聖化される生活上の身分、すなわち結婚生活と家庭生活のもつ価値が明らかになる。それは信徒使徒職の実践と優れた教育の場であり、キリスト教が生活の全領域に行き渡り、日々ますますそれを変えていく場である。・・・こうして、家庭は、その模範とあかしをもって世の罪を指摘し、真理を求める人々を照らす。」(35 項)

（7）信徒の王職とは：「隣人への愛によって信徒は、キリストの王職、すなわち、「仕えられるためではなく、仕えるために来た」(マルコ 10・45) 人の子の権限への参与を実践し、また明らかにする。信徒はいつの時代でも、だれにでもできる、簡単でありながら崇高な方法で、この王職を実践し、明らかにする。」(聖ヨハネ・パウロ二世教皇使徒的勧告『信徒の召命と使命』41 項)

（8）信徒と聖職位階との関係とは：「信徒は、すべてのキリスト信者と同様、聖職にある牧者から教会の種々の霊的善、とくに神のことばと秘跡の助けを豊かに受ける権利を有しており、自分の必要と望みを、神の子らとキリストにおける兄弟にふさわしい自由と信頼をもって、牧者に表明すべきである。」(教会憲章 37 項)

III 「交わりの教会」における信徒の召命と使命

第二バチカン公会議から20年になる1987年に開催された第7回シノドス定例総会の成果をまとめて、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、その使徒的勧告『*Christifideles laici*(キリストの忠実な信者)『信徒の召命と使命』を、1988年12月30日に公布された。その序文でこの勧告の狙いを、次のように強調している。

「第二バチカン公会議以後の歩みを顧み、司教たちは、聖霊がどのようにしていつも教会を若返らせ、大勢の信徒の参加を促し、聖性への新しい憧れを吹き込んでいるかを確かめることができました。つまり、次のようなことが証言されたのです。司祭、修道者、信徒間の新しい協力の仕方。典礼、神のことばを宣べ伝えること、そして要理教育への積極的参加。信徒に委ねられた多様な奉仕と任務、そしてそれらの実行。教会生活における信徒としての関わりに加えて、霊的運動、団体、グループの盛んな活動。教会生活と現代社会の発展における女性のより広範での意義深い参加、など。・・・

実のところ司教たちは、第二バチカン公会議によって表明された信徒についてのすばらしい『理論』が、まことの教会の『実践』となることができるための具体的な方法を十分に示さなければならないという要請を受けとめました。他方、いくつかの問題には、何らかの『新しさ』があることが認められ、それらは少なくとも年代的にみて、第二バチカン公会議以後の問題と呼ぶことが出来ます。・・・

この使徒的勧告は、すべての信徒が個人としてもグループとしても、教会の交わりと宣教においてもっている賜物と責任とをより深く自覚することを喚起し、促進することを目的としています。(2項)

現代世界の急務—『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』

とくにキリスト紀元二千年代の始まりが劇的に意識される歴史上重要な時期にあって、教会の使命に自覚と責任をもって積極的に参加するようにというキリストの呼びかけに信徒が耳を傾けることです。

教会においても、社会的、経済的、政治的、文化的生活においても、今日の新しい状況は、信徒の活動をとくに緊急なこととして要求しています。・・・

公会議は次のように言っています。(『信徒の召命と使命』3項)

『神の民は全世界に満ちている主の霊によって自分が導かれていることを信じ、この信仰に基づいて、現代の人々と分かち合っている出来事、欲求、願望の中に、神の現存あるいは神の計画の真のしるしを見分けようと努める。実際、信仰は、新たな光をも

ってすべてを照らし、人間の十全な召命に関する神の計画を現し、こうして真に人間味ある解決に向けて知性を導く。』(『現代世界憲章』11項)

従って、わたしたちはこの世界を、その価値と問題、希望と不安、成果と失敗を合わせて直視しなければなりません。・・・

現代世界の状況と問題はきわめて重要で、非常に早く変化し続けています。それゆえ、一般化と不適切な単純化は絶対に避けなければなりません。(3項)

世俗主義と宗教的欲求

きわめて多様な宗教的無関心と無神論が広がり続けていること、とくに現代では、世俗主義がおそらくもっとも広くはびこっていることを考えずにはいられません。科学は技術のめざましい発展に不幸にも影響され、特に自由を濫用することによって、神に等しい者になろうとする(創世記3・5参照)非常に古くて新しい誘惑に心を奪われてしまい、自分の心に深く根ざした宗教心を自ら断ち切る人がいます。・・・

けれども、聖性への人類のあこがれと宗教の必要性が、完全に消滅することはありません。・・・現代世界は、いのちを霊的、超自然的なものとして素直に認めるようになり、宗教に対する関心を新たにし、聖なるものの感覚と祈りの心を取り戻し、主の名を呼び求める自由を、声を大にして叫ぶようになっているからです。(4項)

人格尊厳の侵害と過度の人間礼賛

神の生きた似姿(創世記 1・26 参照)としての人格の尊厳が認められず愛されない時、人は屈辱的で、卑劣な『ごまかし』にさらされ、あわれにも『より強い者』、すなわち、イデオロギー、経済力、非人間的政治体制、科学的支配管理体制、マスメディアの押しつけなどといったものの奴隷になってしまうのです。(5項)

紛争と平和

おらく人類は、今までの歴史のどの時代よりも、紛争に巻き込まれているからです。・・・現代人は、さまざまな分野で、自らの『全能の力』を示すことを望み、もっと大規模に、再びあの『バベルの塔』(創世記 11・1-9)を建設するという無駄な経験を繰り返しています。これこそが、混乱と闘争、崩壊と抑圧を生み出し、こうして人類家族は激しく揺さぶられ、傷つけられているのです。

『平和を実現する人々は幸い』(マタイ 5・9)という福音は、現代人のうちに新たに、

また切実に響き、全世界の人が今、平和と正義の実現のために生き、苦しみ、働くようにと呼びかけています。(6項)

人類の希望、イエス・キリスト

教会は、人間性の限界と、罪と悪によって引き起こされるあらゆる困難、遅滞、矛盾にもかかわらず、人類が『交わり』と『参加』のために従事してきたすべての努力が、人間と世界の救い主であるイエス・キリストの仲介によって完全に報われることを知っています。

教会は、自分が、イエス・キリストによって『神との親密な交わりと全人類の一致のしるしであり道具』(『教会憲章』序文) として遣わされていることを十分に知っています。・・・

教会が毎日告げ知らせ、またすべての人にそのあかしをしているのは、人となられた生きた福音であるイエス・キリストご自身こそが喜びをもたらす方、『よい知らせ』であります。

信徒はこれを知らせ、あかしするという根本的なかけがえのない役割をもっています。なぜなら、キリストの教会は、信徒によって、世界の多様な分野で、希望と愛のしるしであり泉として存在しているからです。」(同上7項)

次に、各章の抜粋を引用する。

『信徒の召命と使命』

第三章　宣教する教会における信徒の共同責任

『わたしは、あなたがたが出かけていって実を結ぶように任命した』(ヨハネ15・16)

宣教と交わり

交わりと宣教は相互に深く結びついています。相互に深くからみ合い、相伴うものなので、交わりは宣教の源であると同時に実りをも表しています。つまり、交わりは宣教を引き起こし、宣教は交わりのなかで完成されるのです。・・・

教会の宣教は、教会自身の本性からあふれ出ます。・・・

福音記者ヨハネは、教会の宣教全体が目指している祝福された目標をはっきりさせています。「わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです」(1ヨハネ1・3)。(32項)

福音を宣べ伝える

信徒はまさに教会のメンバーなので、福音を告げ知らせる召命と使命があります。(33項)

新福音宣教を開始する時の到来

かつて宗教とキリスト教的生活が盛んで、生き生きとした活発な信仰共同体を生み出すことのできたすべての国や国民は、今や、広がる一方の宗教的無関心、世俗化、無神論のよって厳しい試練を受け、ときとして根本的に変えられてさえいます。とくに、第一世界と呼ばれているこれらの国々や国民は、たとえ恐ろしい状態の貧しさや悲惨と共存していても、経済的充足と消費主義の中で、『まるで神が存在しないかのように』暮らす生活を促し、広めています。・・・

一方、他の地方や国々では、いろいろな信心の伝統やキリスト教の民間信仰的なものがまだ生き生きと守られています。しかし、この倫理的、霊的遺産もまた、多くの影響、とくに、世俗化と新興宗教の流布に押されて、消滅する恐れがあります。

ただ、新福音宣教だけが、明確な深い信仰の成長を確かなものとし、これらの伝統が真の自由を支える力となることを保証できます。

世界中で、社会の中のキリスト教的組織の改革が、急務であることは確かなことです。しかし、その条件として、これらの国々や国民の中にある教会共同体自体のキリスト教的組織を改革する必要があります。

今日、信徒は、キリストの預言職に参加することによって、教会のこの働きに全面的に関わっています。とくに生活が各人と社会全体に課す問題と期待に対して、信仰がどのように有効なこたえであるかをあかしすること—すべての人が多かれ少なかれ意識をもって予想し、求めている—は信徒の責任です。このことができるのは、信徒が自分自身のうちに見い出される福音と生活との乖離(かいり)をどのように乗り越え、家庭や職場や社会といった日常の活動の中で、福音のインスピレーションとその全面的実現とを体験できるかにかかっています。(34項)

侵すことのできない生きる権利の尊重

たとえすべての人が、全人類の人格の尊厳を認め、その生きる権利を守る使命と責任とをもっているとしても、ある信徒にはこの任務のための特別な肩書が与えられてい

ます。それは、親、教育者、医療従事者、そして経済的政治的権力を担っている人々です。

今日、教会は、全人類、とくに弱い人々や病気の人々を愛情をもって温かく迎えることによって、この重大な時期にその使命を遂行しています。このことは、『死の文化』がこの世を支配しようとしているだけに、いっそう必要です。(38 項)

(『死の文化』:「わたしたちが直面しているのは、まぎれもなく罪の構造というほかはない、より大きな現実であることに間違いありません。この現実は、連帯性を否定する文化、多くの場合『死の文化』という形をとるような文化の台頭によって特徴づけられます。この文化は、文化的、経済的、政治的な力強い思潮によって、大いに助長されます。この思潮は、過度に効率を追求する社会を理想として押し立てます。この見方から状況を検討すると、それはある意味では、強い者が弱い者に仕掛ける戦争だということができます。」(教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音』12 項)

文化と人類の諸文化の福音化

教会は、信徒が文化的に恵まれた地位、すなわち学校や大学などの教育界、科学技術の研究センター、芸術的創作や人文科学の領域などに加わって、勇気と知的創造力を発揮するよう呼びかけています。このような参加は、既存の文化に負担をかけている要素を認め、浄化するだけではなく、福音とキリスト教信仰の豊かさによって、それらの価値を高めていくことを目的にしています。(44 項)

第五章　信徒の養成

「わたしにつながっていれば、豊かに実を結ぶ」(ヨハネ 15・5)

自己の召命と使命を発見し、それを生きる

信徒の養成の基本的目標は、自己の召命を発見し、自己の使命を達成していこうとするいっそう堅固な心構えを養うことにあります。・・・

わたしたちの生涯についての主の具体的なみ旨を見いだせるようになるために、次のような条件が必要です。神のことばと教会の教えに耳を傾けること、忠実で絶えざる祈り、賢明で親切な霊的指導を受けること、自分が置かれている社会的、歴史的状況と神から与えられた賜物と才能とを、信仰の目で識別することです。(58 項)

一貫した生き方のための総合的養成

自己の召命と使命の発見と実現によって、信徒は、教会の一員であることと、人間社会の市民であることとを一致できるよう養成される必要があります。

信徒は、二つの並行した生活をしているのではありません。つまり、霊的な価値と要求をもったいわゆる『霊的生活』と、家庭は仕事、社会的関係や公共生活の責任、文化活動といたいわゆる『この世における生活』との二つの別々な生活をしているのではありません。・・・実際、信徒の生活のあらゆる分野が神の計画の中に入っています。・・・仕事上の能力と連帯、家庭における愛と献身、子どもたちの教育、社会奉仕と公共生活、文化の領域における真理の促進など、すべての活動、状況、実際的な責務はみな、『信仰、希望、愛の絶えざる実践』のための摂理的な機会なのです。(59 項)

養成の種々の側面

信徒の総合的で一貫した養成に伴ったいろいろな側面は、この一致した生活の中で考えられなければなりません。

いうまでもなく、霊的養成が各人の生活で優先されるべきです。・・・

教理に関する信徒の養成が、今日、急務であることは明らかです。・・・

ですから、年齢とさまざまな状況に合わせた系統的な信仰教育が絶対に必要です。それはまた、今日の人間と社会を悩ませる、絶えることのない、しかも新たな問題にこたえることができるように、文化をもっとキリスト教的に向上させていくことでもあります。

これは、とくに社会のいろいろな分野や公共生活において責任を担っている信徒にとっての真理です。とりわけこういう人々が、『教会の社会教説』についてより明確な認識をもつことは不可欠なことです。・・・

この教説は、まず信仰教育の基礎課程で示され、また、独自の研修会、学校や大学で教えられなければなりません。・・・

信徒の宣教的かつ使徒的活動の意味を明らかにする、信徒の総合的で一貫した養成には、人間的な価値を養う配慮が組み込まれているべきです。」(60 項)

IV　新福音宣教に取り組む

特に、1980 年代に教皇ヨハネ・パウロ二世によって叫ばれた新福音宣教の必要性は、

教皇ベネディクト十六世によって自発教令『信仰の門』(2011年10月11日付)の中で、2012年10月11日から2013年11月24日を「**信仰年**」と定め、全教会において新福音宣教に向けて新たな取り組みを促す機会とした。

それは、「キリスト教信仰を伝えるための新福音宣教」をテーマにしたシノドス(世界代表司教会議)の会期中であった。日本では、「新福音化委員会」を司教協議会に設置した。

そして、教皇フランシスコは、その信仰年を閉年する2013年11月24日に**『使徒的勧告:福音の喜び』*(Evangelii Gaudium)***を発布した。

この使徒的勧告の**序文**で、教皇フランシスコは次のように説明している。

「わたしは、シノドスの教父たちからもとめられたこの勧告の執筆を、喜んで引き受けました。こうしてわたしは、シノドスの作業の実りを収穫することになります。(16項) ・・・現代世界における福音宣教について、ここで考えられる課題は、数えきれないほどあります。しかし今ここでは、より注意深く掘り下げた研究を必要とするこれら多くの問題については、細かく取り扱わないこととします。なお、教会と世界とにかかわるすべての問題について、決定的で完全な回答を教皇の教導職に期待すべきでないと思います。それぞれの地域で問われているすべての問題についての識別を、地方司教に代わって教皇がおこなうことは適切ではありません。この意味でわたしは、健全な『脱中央集権』を進める必要を感じています。(16項)・・・

事実、ここで取り上げていることば、すべて福音宣教者の明確な姿を描く助けになります。」(17項)

以下に、『福音の喜び』本文からの抜粋を引用する。

第一章　教会の宣教的変革 (The Church's Missionary Transformation)

I　出向いて行く教会

今日、イエスの命じる『行きなさい』ということばは、教会の宣教のつねに新たにされる現場と挑戦を示しています。皆が、宣教のこの新しい『出発』に招かれています。すべてのキリスト者、またすべての共同体は、主の求めている道を識別しなければなりませんが、わたしたち皆が、その呼びかけにこたえるよう招かれています。つまり、自分にとって居心地の良い場所から出て行って、福音の光を必要としている隅に追いやられたすべての人に、それを届ける勇気をもつよう招かれているのです。(20項)

弟子たちの共同体の生活を満たす福音の喜びは、宣教の喜びです。・・・